

水辺環境の未来と生物多様性

とよあしはら みずほのくに
 豊葦原の瑞穂国——豊かなアシ原が広がる、稲穂が実る国——とは、『古事記』にみえる日本の美称。日本列島の多くの地域
 の原風景はこうした湿地帯で、生物多様性のポテンシャルも高かったことがうかがわれるが、水の恵みは水の脅威と表裏一
 体。そのため、とくに明治以降は近代合理主義的な治水に力を注いできた。しかし今、私たちは失ったものの大きさに気づき、
 ターニングポイントを迎えつつある。そんな日本各地の水辺の現状と持続可能な社会構築に向けた取り組みをみる。

川と創る自然共生型社会 多自然川づくりの可能性

島谷幸宏×吉村伸一（進行〓編集部）

「多自然型川づくり」の夜明け

編集部 お二方には、月刊誌『FRONT』の連載「多自然型川づくり」や「川のトータルデザイン」などで、各地の先進的な川づくりの現場取材していただきました。本日は、これら取材先やご自身が整備に関わられた川などを例に挙げながら、川づくりの変遷やこれからの河川像について語っていただきたいと思えます。まずは吉村さん、多自然型川づくりの先駆けとなった、いちち川のことからお話いただけますか。

吉村 いちち川を手がけたのは一九八二年（昭和五七）ですから、もう四半世紀が経ちますね。当時は人々が河川環境に関心をもちはじめた時代でした。東京では一九七〇年代に人工的な水の流れを再現した古川親水公園（江戸川区）ができたりして。でも、川そのものの再生はほとんどありませんでした。

その頃、横浜市役所の職員を中心に市民活動グループ「よこはまかわを考える会」ができて、都市の川を生き物が棲める、川らしい川^①にしていこうと、各地の川を見に行っただけです。横浜のドブ川

ばかり見ていると展望が生まれないので。川は本来、水の流れに変化があったり、水際に植生があったりと複雑な構造をしています。それが川らしい川。いちち川は、改修されて単純な構造になってしまったのですが、川らしさを取り戻すにはどうすればいいかを考えて始めた取り組みでした。

島谷 私が建設省（当時）に入ってからすぐの頃ですね。山梨県に二年間出向したあと土木研究所の都市河川研究室（当時）に行き、そこでのテーマが「都市域に望まれる河川像に関する研究」。それが本



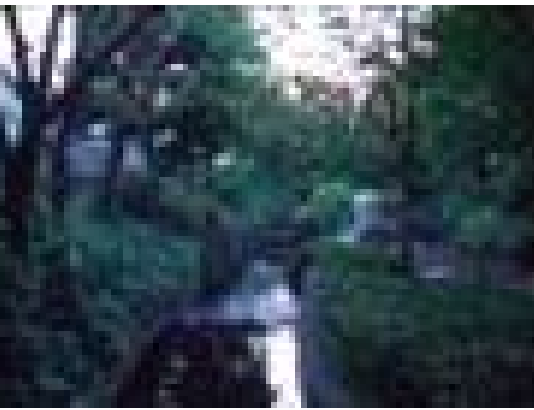
よしむら・しんいち
 1948年北海道生まれ。
 株式会社 吉村伸一流域
 計画室代表。技術士。室
 蘭工業大学土木工学科卒
 業。横浜市役所に入り、
 いちち川など横浜市内河川

の自然復元に取り組む。98年より現職。『和泉川東山の水辺・関ヶ原の水辺』（横浜市）と『石井樋地区歴史的な水辺整備事業』（佐賀県）の計画設計で土木学会デザイン賞受賞。共著に『多自然型川づくりを超えて』（学芸出版社）、『日本文化の空間学』（東信堂）、『まちづくりへのプレイクルー 水辺を市民の手に』（彰国社）ほか。



しまたに・ゆきひろ
 1955年山口県生まれ。
 九州大学大学院工学研究
 院教授。専門は河川工学・
 河川環境。同大学大学院
 工学研究科修士課程修了
 後、建設省（現 国土交通
 省）に入る。主に土木研究所にて河川景観保
 全や自然再生などの研究に従事。2001年武雄
 河川事務所長として石井樋復元やアザメの瀨自
 然再生に関わる。03年より現職。著書に『河
 川風景デザイン』（山海堂）、月刊誌『FRONT』
 の連載記事をまとめた『河川環境の保全と復元—
 多自然型川づくりの実際』（鹿島出版会）ほか。

1973年に整備された古川親水公園。下水道の上に川から引水し、せせらぎを再現。



横浜市栄区のいたち川。右が修景整備前（1992年頃撮影）、左が修景整備後約15年（2009年撮影）。



山口市の一の坂川ホタル護岸。1971年の水害を契機に、ゲンジボタル再生を目指した河川改修を実施。右は施工直後、左は近年の様子。（写真=2点とも山口県土木建築部河川課）

格的な河川環境研究の始まりで、うちの研究室と交流のあった東京都土木技術研究所（現東京都土木技術センター）を訪ね、古川親水公園や仙台堀を手がけて「親水」という言葉をつくった方に話を聞いたりしました。

コンクリートジャングル化した都市では、雨水は一気に川に流れ込むので洪水の危険性が増します。土地の確保が難しい都市部の洪水対策は、河床をどんどん掘り下げてコンクリート張りの川にしていくことになる。そうして人は川と疎遠

になった。このような都市河川の水害問題に対するアンチテーゼとして環境の問題が出てきて、「親水」という言葉も生まれました。

人と水辺の関わりなどいろんな事例を調べるなかで、いたち川のことを知りました。その頃、各地の都市部の川でさまざまな動きが出てきたんですね。山口県の一の坂川の整備も同じ頃ですかね。

吉村 一の坂川はもともと早いです。昭和四〇年代です。整備された頃は水際に木杭を打つたりとか、ちよつと人工的なところがあつたんですけど、昨年、二十数年ぶりに行つてみたら、とてもよくなつていました。

当時、都市河川研究会を立ち上げましてね。現在、全国水環境交流会代表理事の山道省三さんや山梨大学の北村眞一さん、もう亡くなられましたけど横浜市環境科学研究所の森清和さんや日本河川開発調査会の石崎正和さんとかと。森さんは環境問題を社会科学の立場から切り拓いていった方で、「方針を出しても世の中変わらない。大切なのはムーブメントだ」ってよく言つておられました。たとえ政策的に素晴らしい方針が出て、市民を含めて動いて実例をつくつていかに限り、何も変わらないと。一の坂川は、昔、森さんと二人で見に行つたんですよ。**島谷** 私もその都市河川研究会に誘われて入り、育てられました。八五年くらいだったでしょうか、河川審議会で河川環境に関する答申が出て、河川における環境の重要性が認識されるようになった頃

です。リバーフロント整備センターもできて、多自然型川づくりが本格的に始まるんです。「FRONT」の取材で毎月一つづつ川を見に行きました。

吉村 あれ、毎月でしたもんね。研究室のスタッフを連れて、タモ網を持って行つたんでしょう。

編集部 私も何度か一緒に、タモ網で魚を捕るコツなども教えていただきました。

島谷 行くだけで大変でした。でもいい経験でしたよ。現場を見ないとわからないということが、よくわかつたから。あの頃整備されたものは、後で見に行つてもいいものが多いです。鳥取県の八束川とか北海道の茂漁川とか。茂漁川は今見ると、もう少し川幅をとつて蛇行させてもよかつたかなと思つけれど。

吉村 茂漁川は周辺の河畔林と一体化させ、まちづくりとして整備しているところがいいですね。ただ、当時は多孔質な水際が大事だということで、空石積みですが河岸を固めているんです。

島谷 吉村さんでさえ、最初は河岸を固めてましたもんね。

吉村 島谷さんがいたち川に来たとき、低水路の水際が大きな石で固められていました。あれは、土木事務所があとから入れたものです。でも、言われてみると、当時は私も低水路をどう安定させたらいいかということを考えていました。ですから、水際には一五〜二〇cmの捨石で保護しました。川の形が変わつてもいいと概念的には思つていても、やっぱり川岸

北海道恵庭市の茂漁川。



鳥取県若桜（わかさ）町の八東川。右は復元直後（写真＝鳥取県郡家土木事務所）、左は2006年撮影。



「多自然川づくり」の 目指すもの

を護ろうとしていたんです。
今の多自然川づくりでは、川の働きを活かすという考え方を基本において、川幅を広くとって川の自由度を高くする。水際は固めない。そして人間のための防護ライン（護岸）は後方に置くという考え方ですね。

島谷 川は、変形できる余地があれば長い時間をかけて自然をつくっていくはず。人間は自然のつくり手ではないので限界があります。だから、なるべく水際から遠いところで護って、川の中は壊れてもいいようなものに変えようというのが今の考え方です。流れが速い水際ではなく、控えて護岸するわけだから、安全にするという意味ではかえって合理的なんです。

吉村 北海道の真駒内川では、河岸は切土のまま護岸は後方に入れていました。このような控え護岸にすると、護岸の前に川の作用を受け止めるスペースができるので、治水上也有利だと思います。
島谷 そうすることで日本の川は格段によくなる。いろいろ経験して、最近私もこれなら大丈夫だと確信をもって大胆にやれるようになりました。岩手県の元町川とか、宮崎県の山附川とか、かなり大胆ですよ。

吉村 元町川も山附川も、島谷さんがアドバイザーとして行っていますよね。元町川は控え護岸にしたり、河岸も片方残

してある。挟れても影響の少ないところでは切土のまま護岸を入れていない。同じ岩手県の土谷川では、山付きの淵があるところや河畔林、レッドリストに載っている貴重な植物があるところはいじっていない。

川幅を広げるとき、片側だけ拡幅することを中小河川の技術基準として打ち出したことは画期的です。両側を拡幅すると景観ががらりと変わってしまいますから。川岸の片方を残すと、その川の地形・景観の特性が残るので、それは大切にしたいですね。

島谷 国交省が出した今度の技術基準では、基本的に流速をなるべく上げない川づくりをしようというところが大きな思想の転換です。それは先ほど言った、都市化によって川にどんどん水が集まって流れも速くなり、かえって水害が起こるといった問題に対する一つの解答でもある。都市化による洪水流量の増加という問題の根本的な対策は、早く水を流すことではなく、ゆっくり水を流すことなんだということ。そうしないと、河川環境は悪くなるし、洪水はもつと下流で起きるし、結局いいことないんですよ。

吉村 宮崎県高千穂町の山附川もよくやりましたよね。それまでの災害復旧はコンクリート三面張りだったのに、災害復旧工事の常識を覆した。

島谷 山附川の改修は地元で喜ばれて本当に嬉しかった。二〇〇五年の水害で壊滅状態だったホテルもみられるようになって、恒例だったホテルまつりも復活

したそうです。

吉村 河岸が崩れて川幅が広がった箇所を広がったままにしたところがすごい。普通、被災前の状態に川幅を戻しますよね。そこを島谷さんは「川は広がりがっているから、このままにしておきましょう」とか言ってる……。

島谷 なぜそう判断したかというところ、あんな大きな洪水でここまで削られたんだから、川幅を狭めたらまた削られる可能性がある。広げたままにしておけば、たぶん、中程度の洪水の時には土砂がたまって川幅は狭まらるけれど、次に大きな洪水が来ても今回拡幅した部分程度までしか掘れないだろうと考えました。

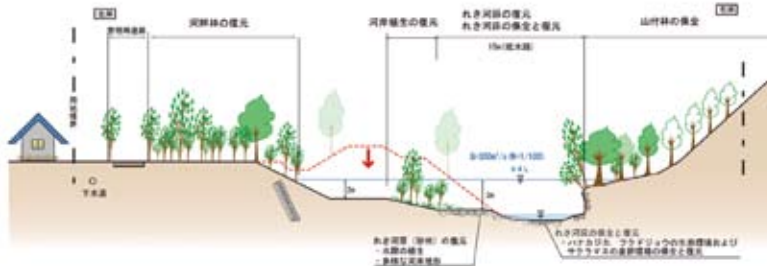
吉村 広がったままにしておけば、これ以上は削られない。被災したと思わず、見方を変えて、川の破壊力はそこで止まったと思えばいい。洪水時に川があちこち削っているのは、そこでエネルギーを消費しているということ。両岸を固めてしまうと、川は下を掘るしなくなる。そしてどんどん川底が下がり護岸の基礎が出てきて、大きな洪水がまた来たら護岸が崩れる——という繰り返し。だから、あちこちでエネルギーをゆっくり吸収するしくみが必要なんです。

川幅を広げることによって川の自由度が上がって、自然な川になる。そういう川が町なかにあるのは、生物にとっても人の暮らしにとってもプラスになる。川づくりを契機に、豊かなまちの空間に切り替えていく。横浜市の和泉川では、広く土地を買って、周辺にある緑地と川をつ

多自然川づくりと従来技術の設計原理の比較

	従来技術	減災型技術	環境統合型技術
流速	なるべく速やかに	なるべくゆっくり	オリジナルな状況（ゆっくりの所はゆっくり）
平面線形	なめらかに、止水域をなくす		なるべくオリジナルに、直線化しない、レフュージ保全
横断面	水理学的有利断面	なるべく広く	オリジナルな微地形ができるように
縦断面	動的平衡勾配、段差がでてても良い	動的平衡勾配、段差がでてても良い	オリジナルな勾配、人工的段差ができないように
土砂移動	河床高のコントロール	河床高のコントロール	河床高のコントロールと適切な分級
微地形	局所洗掘対策	局所洗掘対策	瀬淵などオリジナルな微地形ができるように
川幅の変化	一定	広いところを作る	変化がある
護岸	必要に応じてする	必要に応じてする	なるべくしない
河岸			変形することが基本
河道内樹林	無いほうがいい	河道貯留施設として必要に応じて	あるべきところにある
河畔林、水防林		水防林が重要	生態的機能を持った河畔林重要
支川処理	洪水時背水および内水	左+氾濫時の状況	左+連続性の確保
景観			直線を用いない、コンクリートが露出しないなど景観に配慮
利用			利用に配慮、少なくとも川に降りられること
環境重要地点			設置し、保全する

（島谷幸宏氏の資料をもとに作成）



岩手県葛巻（くずまき）町の元町川。



北海道札幌市の真駒内川。左岸のみ拡幅し、護岸は立てて水際から遠い位置に入れている。

（図版＝北海道札幌土木現業所）

「多自然川づくり」に変わって、島谷さんはそれに先立つ「多自然型川づくり」レビュー委員会の委員も務めておられますが、そのあたりから川づくりの考え方が変わっていったのですか。

島谷 そんなことないです。基本的な思想は最初から変わっていない。それをどうやって実現したらいいかという方法論を議論してきて、ここ五年くらいで技術が確立してきたんです。理念を技術化するというのは結構難しいですね。

今後の課題とデザインの重要性

編集部 四年前に「多自然型川づくり」から「多自然川づくり」に変わって、島谷さんはそれに先立つ「多自然型川づくり」レビュー委員会の委員も務めておられますが、そのあたりから川づくりの考え方が変わっていったのですか。

島谷 そんなことないです。基本的な思想は最初から変わっていない。それをどうやって実現したらいいかという方法論を議論してきて、ここ五年くらいで技術が確立してきたんです。理念を技術化するというのは結構難しいですね。

なく「川・まちづくりプラン」を立て、一部が実現しました。川の中だけでなく、川が流れる空間全体を豊かにするという発想が重要です。

島谷 多自然川づくりは、最初に治水ありきではなく、いい地域、いい社会をつくるための道具として川づくりをやることを目指している。本来、技術がちゃんとしていけば、治水と環境は両立できるはずなんです。

川の魅力は川が変化することにあります。生き物がいて季節ごとに変わる景観、川の形も徐々に変化し、洪水が来たら植生も変わったり、まったくなくなったり。そういう変化が面白いし、子どもたちも生き物と触れ合ったりできる。だから、川自体が変化できるしくみを技術的に実現していかないと、面白味のない川ができてしまうわけです。



横浜市瀬谷区のと泉川（東山の水辺）。右は施工前、左は施工後。とても同じ川だとは思えない。



宮崎県高千穂町の山附川。2007年10月、多自然川づくり国際ワークショップでの視察。

埼玉県朝霞市の黒目川。右が河床幅の狭い下流部（標準断面）、左が川幅を広げたことで河原が出現した上流部。

長野県軽井沢町、湯川沿いのハルニレテラス。逗留型の温泉旅館「星のや軽井沢」の一施設。



たとえば吉村さんがやっていた片側改修とか、なるべく流速を上げないという原則とか、漠然と思っていたことを言語化して、河川事業として破綻がないかいろんな角度からチェックして……という作業をやってきました。まだやれていないこともたくさんありますが。

吉村 川の豊かさと生物多様性の回復という多自然本来の目的との関係では、周辺を含む河川空間の広さと質が重要です。今はまだ洪水流量がベースの空間で、河道内でどうするって段階ですから。

島谷 河畔林の問題や川沿いの設計、流域との連携などもやりたいですね。

吉村 可能性はどのまちなにもある。川沿いの公園や緑地と一体化するとか。

島谷 都市部だからできないということも決まってる。たとえば今、都内の善福寺川で激特事業（河川激甚災害対策特別緊急事業）をやっています。○五年の洪水で三〇〇戸以上の家屋が浸水したところですけど、杉並区の川沿いの公園のところで川幅を広げ、親水効果も考えて緩やかな傾斜をつくったりしています。

吉村 ただ、施策が良くてもデザインで台無しになることもあります。先日、都市河川研究会で長野県の「星のや軽井沢」に行きました。土木学会デザイン賞を受賞した温泉旅館です。湯川という川が隣接して流れていて、最近、川沿いの私有地に遊歩道やテラスを整備した。「ハルニレテラス」と言います。民間事業ですが川自体はいじっていません。川に面して設置したテラスは河畔林や地形を傷

めないよう配慮している。川沿いの遊歩道は、川からセットバックして河畔を保全している。川とその周辺のバランスを考慮した質の高い空間設計なんです。行政がやると親水性などと称して、川をいじってしまいがちですが……。

島谷 デザインといっても、都市と川のデザインは違いますよね。都市デザインは至れり尽くせりのつくり込むデザインを志向しますが、川のデザインはつくり込まないデザインとでもいうか、川を活かすためのデザインで、川が自ら変形することをよしとしている。そこが都市デザイナーにはなかなか理解してもらえないところですね。

吉村 多自然川づくりは、川の働きによる変化を前提にしているわけですから、いいものほど何をどうデザインしたのかわからない。そこが評価しにくい。

川のデザインは、川だけ見てもアイディアは浮かびません。その川が流れている空間の全体的な良さを見つけているのが大切だと思います。島谷さんが手がけられた埼玉県の黒目川ね、決して難しいことはしていないんだけど、設計によってこんなにも違うのかって思う。何がいかって、この河原です。人がいっぱい来ているでしょう（写真左上）。

島谷 どうやってたら河原ができるのか、ということ。下流部で同じようなカーブがありますが、水面がこれだけ狭いと流れが速いので、流量は同じでも普通、河原はできません。だけど川幅を広くすれば水がゆっくり流れるから、土が溜まった

り掘れたりして河原ができるわけです。

吉村 川のためのスペースがあれば、川が運んできたものがそこに溜まる。島谷さんのデザインでは、川が自ずと河原をつくってくれるようになってくる。河道設計の違いが、この河原に現れているんです。

島谷 最近、こういう何でもない川づくりができるようになりました。機能面でも、川幅が狭いところだと洪水時には魚が流されてしまうけれど、川幅が広げれば淀みができるので、そういうところに



北海道新得町を流れるペンケ新得川に設置された早瀬魚道（おはじき魚道）。



堰堤の一部を切り下げた北海道標津町のイケシヨマナイ川。上流からの土砂供給によって川底に礫河原が回復した。

右/佐賀県唐津市相知（おうち）町、松浦川中流部の「アザメの瀬」全景。2008年3月撮影。アザメは植物のアザミの方言。中/地域住民による草刈り。左/堰返しに興じる相知小学校5年生。（写真=3点とも国土交通省武雄河川事務所）



魚が逃げ込める。

吉村 これからの川づくりでは、川の作用と治水・環境のバランスをとることが重要になると思います。

この間、既存の治山堰堤にスリットを入れて切り下げた例を見ました。北海道標津町のイケシヨマナイ川で、堰堤下流の河床が数メートル下がって岩盤が露出していたというのですが、堰堤にスリットを入れることによって土砂供給がなされて、元の礫河川が回復してしましました。今後の変化を見る必要がありますが、面白い試みだと思います。

島谷 堰堤を切り下げるだけでこんなに変わるんですね。

吉村 新得町のペンケ新得川では、考案者が「おはじき魚道」と言ってますけど、川の石を詰めた円盤状の袋詰構造物を敷き並べて早瀬をつくっている。固定法や耐久性を考える必要がありますが、従来がない方法で興味深い事例です。

自然再生事業と市民活動

編集部 ○二年度に「自然再生推進法」ができて、国交省でも自然再生事業がおこなわれていますが、島谷さんが武雄河川事務所時代に関わられた「アザメの瀬」もその一つですよ。

島谷 アザメの瀬は、松浦川中流部の毎年のように洪水被害を受けていたエリアの水田を買って、氾濫原の湿地再生を図ったものです。今や驚くほどの生き物の宝庫で、準絶滅危惧種になっている水生昆虫コオイムシの一大棲息地になって

います。魚の産卵も以前の四〇倍ぐらいですよ。本来、日本中の川沿いに洪水時に氾濫する場所がいっぱいあって、そこに魚が入って産卵していた。そしてそこは子どもたちの遊び場でもあったのに、今はそういう場所が消えてしまった。

吉村 氾濫原は大事な場所です。そういうところに川の豊かさ、生物の豊かさがある。そういうものを失って川は単調化したんです。

島谷 無駄があるんだけど、トータルでみると決して無駄じゃない。洪水も貯留するし。何ごとも無駄がなくなるのは怖いですね。

アザメの瀬は、最初から徹底した住民参加型事業として進めてきました。整備は終わりましたが、話し合いはまだ続いていて、もう一〇〇回近くやっているんじゃないですか。アザメの瀬をバックアップする住民主体のNPOアザメの会が自発的にできていて、草刈りの委託契約をしているんです。しかも実際に草刈りや掃除をしている作業量は委託分の二〇倍にも及びます。住民の方々の主体的な活動によって子どもたちはさまざまな活動ができています。

吉村 あそこはすごく広いですからね。行政だけでは維持管理できないでしょう。

島谷 アザメの会がうまくいっているのは、子どもたちの存在があるからです。地元の小学校で四年生から授業の一環として川遊びをさせていて、五年生になったら稲作体験をする。作業の後は水遊びをします。収穫後は餅つきをして全校生

徒の給食にふるまう。冬は堤返しといって、池の水を干し上げて魚を捕まえる。子どもたちがアザメの瀬に来たときの安全を考えて、地元の人たちは草刈りをしている。人件費はほぼボランティアなのに、子どもたちの喜ぶ顔を見るのが楽しいですね。

吉村 福岡の遠賀川水辺館は、地域の防災・減災拠点として国交省がつくった施設ですが、NPO法人直方川づくりの会が核になって活動をしていますね。ここでは小学生から中高校生、大学生まで世代別のグループがある。去年からは親父の会もできて、小学校に入る前の子どもたちを対象にしたリトルキッズという取り組みもできた。地域に住む小さな子どもから大人まで、世代がつながっているというところが面白いですね。

島谷 遠賀川水辺館では違う学校から集まってきて、そこで育った子どもが大学生になって、九州の大学生を集めた水害ボランティアの会を組織したりしている。関東でも荒川知水資料館とかよくやっています。そういう川を舞台にした草の根



福岡県直方市の「遠賀川 直方の水辺」。NPO 直方川づくりの会など市民部会もアイデアを出してつくられた河川空間は、2009年土木学会デザイン賞を受賞した。

の活動から、新しい民主主義のカタチが見えてきます。

吉村 河川管理者と市民団体との連携、協働は、河川法改正以前から積み重ねてきて今日がある。今後は行政とNPOの協働に関するルールや制度的なしくみを具体化することが必要だと思います。

トトロの国三つくり

島谷 佐渡のトキ野生復帰事業などでおつきあいのある東京工業大学の桑子敏雄先生は、土地の履歴を知る「ふるさと見分け」が必要だとおっしゃっています。地形と神社を見れば、その地域にどういうリスクと恵みがあるのかわかる。稲作は洪水のリスクをある程度抱えながら、水の恵みを最大限に活かすシステムですから、日本人はリスクと恵みが常に背中合わせにある中で生きてきたわけです。

吉村 それは川の見方にもいえます。多自然川づくりも基本はそこにある。自然界のバランスの上に成り立っている川が問題で、悪循環に陥って結局リスクを大きくしている可能性があるわけですか



東京都あきる野市の平井川。深い淵を残して整備したので、魚も河童（ミスガキ）もたくさん生息している。川の形の多様性が生き物の豊かさにつながる。

ら。

島谷 リスクを減らすために恵みも減らしてきたわけですね。それを取り戻そうというのが、多自然川づくりの大きな思想。技術思想のパラダイムシフトなんですよ。「多自然」というネーミングについても議論しましたが、「多自然型」がやっと浸透してきたのここで名称を変えると、また違う川づくりをするのではないかとこの混乱を招く恐れがあるので「型」だけ取ったんです。

建設省で多自然型川づくりの推進に力を注ぎ、九五年に四六歳の若さで癌で亡くなった関正和さんは、「川の中の石や草にも命がある。そういう八百万の神に感謝しながらやるのが多自然型川づくりなんだ」ってよくおっしゃっていました。多自然（型）川づくりは、そういう日本独特の自然観をベースに、機能を分化しながら発達してきた近代技術を統合し、多面的な見方や考え方で進めるもの、ひとつのポストモダンです。吉村さんがよくおっしゃる「読み解く」という言葉は、桑子先生のふるさと見分けに似ています。数式とか数字ではものは見えません。

吉村 現場を見る目と想像力なんです。現場を見て、洪水時の流れや氾濫リスクを想像する。何を大事にするか、何をしないかを見つける。そういう、空間的なもの見方やイマジネーションが大事だと思います。

島谷 技術者教育というのは、知識を教えることではなく、そういうセンスのあ

る人を育てることだと思います。

九州大学の一年生の共通授業で毎年、同じテーマでレポートを書かせるんですよ。「君たちはトトロの国とアトムの中のどちらにしたいか」って。つまり、自然共生型の『となりのトトロ』のような世界と、科学技術の進歩で生まれた『鉄腕アトム』の世界。トトロ派が結構多いんですよ。人と人が温かなつながりをもって力を合わせていく、あるいは虫に刺されたりもするけど季節感があり自然と共生するトトロの世界を目指すべきで、それはアトムの世界では無理だと思う、とかね。七割くらいがトトロ派で、三割がアトム派。未来の展望はありますよ。

吉村 私はアトム世代ですが、健全ですよ。若者はいつの時代も考えていますよ。
島谷 若者が思っている通りになるんですよ。私たちの世代は、アトムの国を願っていたらそうなっちゃった。全然よくなかったけど。

桑子先生がおっしゃるには、日本では人間世界の内側に自然があるけれど、西洋では神がつくった人間世界の外側に自然がある。だから人間世界と関係ないところで自然保護がおこなわれる。日本では、人間の世界である山に神様が住んでいてそこは大切にするというように、自分の領域内での自然保護が日本人的な考えなのだ、と。

吉村 近代科学的な思考は抽象化に向かう。だから自然とか環境とか言ったときに普通名詞になって一般化されてしまう。それは市民参加型事業でも同じで、



2010年7月14日 東京・神楽坂「馳走紺屋」にて収録。(撮影=38頁とも編集部)

バラバラな情報や考え方が出ることが大切なのに、まとめて一般化する傾向がある。この川のどこが自然らしいのかとか、自分はこの川のどこに思い入れがあるのかとか、具体的な個別の川の姿が見えなくなると、この川のどこを大切にしたいのかわからなくなるんですよ。

島谷 「生物多様性」も学問にすると西洋的な科学偏重の傾向がありますが、基本的な考え方を日本的に言うとう、「生きとし生けるものに命あり」。なるべく殺生しないで、もともといた生き物がちゃんと生きられるようにしましょう、ということですよ。その点、日本人はもともと「生物多様性」の考えが身についているのでは……。

吉村 日本は神様も八百万で多様性がありますからね。

編集部 本日は幅広い多様なテーマでお話しいただきありがとうございました。
(無印写真：吉村伸一、構成：編集部)